

教育講演 I

【12:40~13:40】

重度知的障害者を企業戦力に！

—顧客起点で発想し顧客の期待を上回るサービスを提供する—

四王天 正邦

(株式会社 三越伊勢丹ソレイユ 代表取締役社長)

○障害者の能力を活用し、親会社の業績向上を図ること

- ・企業が人を採用するのは経営力向上のため。法律に縛られて、「義務感」から雇用するものではないはず。
- ・法定雇用率（2.0％）の達成や、企業の社会的責任（CSR）、社会貢献などは意識しない。
- ・障害者といっても社員。
社員を雇用することは会社の利益のために働いてもらうためである。

○担当業務の根本方針

『本業に直結する業務を担うこと』

- ・障害者を雇用するために新たな業務を創出する必要はない。
- ・本業に貢献し、利益を上げなければ株主を筆頭とするステークホルダーへの責任が果たせない。
- ・ソレイユの社員の存在を親会社内で認識してもらうには、彼らの働きが百貨店業務に深く関連し、それがいかに売り上げ向上に貢献しているか…を示すのが重要である。

○本業に直結する業務による波及効果

1. 利益創出の一部分なので経営資源を有効活用し親会社の負担にならない。
2. 経営階層の理解が確実に得られ、社内のバックアップ体制が強固である。
3. 健常社員も障害社員も利益追求という労働意識のベクトルが一致している。

4. 業務によっては障害者の方がハイパフォーマーなので健常者から尊敬される。
5. 健常社員の障害者に対する認識が改められ、協働意識が醸成される。
6. たとえ本体業績が低下しても、利益創出部門としてリストラ対象にならない。
7. ソレイユで働く障害者も「三越伊勢丹社員である」という誇りと忠誠心を持っている。

○ワークシェアリングによって生産性の向上

- ・障害者・健常者それぞれが持つ優れた能力をそれぞれの得意な分野で発揮する。

○100種類以上の作業種

〈内容〉

- ・100種類以上の作業のうち、毎日10種ほど実施
- ・全作業種を毎日ローテーションし、担当を固定しない。
- ・担当作業は朝ホワイトボードに掲示されて初めて知る。

〈効果〉

- ・多品種にすることで業務を安定的に確保
- ・小ロット、スポット、イレギュラーに対応
- ・時期によって変動する業務量に対し要員を柔軟に対応
- ・できる仕事が増える喜び

○障害者に対する基本姿勢

1. 配慮はするが優遇はしない。
2. 身体・知的・精神に障害があっても『魂』に障害はない。
3. 明日は我が身。

○雇用の基本的考え方

1. 「特例子会社」の社会的使命を重視。
2. 高いマネジメント力で「重度」を核とする。
3. 「難」への挑戦。

○教職者への期待

1. 生徒（利用者）との接触頻度・時間の拡大
 - ・導きの第一歩は信頼関係構築から。
 - ・特別支援学校生の成長度は数値で表せない，だから日々のアセスメントが重要。
 - ・先生自身の時間とエネルギー配分を見直し。
2. プロフィールの把握
 - ・本人を取り巻く環境が行動への影響大。
 - ・立体的な評価が必要。
3. 道理・因果がわかる指導
 - ・これをこうするとこうなる。
 - ・成功体験を得るための『失敗体験』こそ最良の教材。
 - ・指示は理由付きで。ただ「やりなさい！」では不毛。
4. 障害特性を活かす指導
 - ・健常者が不得手の単純反復作業性で優位に立つ。
 - ・正確性>スピード 持久力>瞬発力

5. 概念で上限を定めない

- ・障害者は自発的に学習し，向上しようとする意識は弱い。
- ・レベルを上げていくには他からの働きかけが必要。
- ・指導する者が「これくらいでいいか・・・」と思うと成長は止まる。

○作業学習について

- ・高いスキルを身に付けることだけが目的ではない。

○教育への期待

- ・社会から愛される人間としての基本育成。
- ・企業は地道に『道德教育』を受けた人間を『無垢素材』として企業戦力に育てたい

○各学部での役割期待

- ・小学部：ADLの確立
- ・中等部：ルールが存在，○と×の判断
- ・高等部：IADLへ向上，他と個意識，強点開発

○今後の課題として

- ・「個」ではなく、「組織」として力を発揮するには「共有」と「継続」そして「連動」が重要

教育講演Ⅱ

【13:50~14:50】

通常学級における発達障害のある児童の理解と支援

腰川 一恵

(聖徳大学児童学部)

KEY WORDS: 通常学級, 幼児期, 授業改善, 特別支援教育コーディネーター

I. はじめに

特別支援教育が始まり、公立幼稚園、小学校、中学校では校内委員会や実態把握、特別支援教育コーディネーター（以下コーディネーターとする）指名は95%前後もしくはそれ以上であり（文部科学省,2014）、校内の支援体制は整えられていることがうかがえる。また、学校を支える巡回相談や専門家チーム、研修も年次ごとに活用や実施の割合が高くなってきている（文部科学省,2014）。このように体制は整えられてきており、管理職や教師の意識も変化してきた。この中で、多くの教師は悩みながら、改善を積み重ね、一步一步の取り組みを続けている。

しかし、園や学校現場の個々に目を向けると、在籍している幼児児童生徒に対する取り組みは必ずしも十分ではない状況もみられている。通常学級の特別支援教育の難しさは、発達障害のある児童の状態も異なり、そのまわりの児童の集団も影響し、さらに担任教師もひとりひとりが異なることによる。

これまで、通常学級の発達障害のある児童の理解と支援を進めるために、校内研究や巡回相談を通して教師に対するコンサルテーションを行ってきた。これらの実践の中から、「幼児期の支援」の重要性、児童のニーズの把握を「具体的な支援や授業」につなげるために何が必要であるのかを整理してみたい。また、教師やコーディネーターを中心とした研究から、「教師を支援」するためにどのようなことが明らかになっており、課題があるのかについてまとめていきたい。

II. 幼児期の支援と課題

小学校通常学級の担任教師からインタビュー調査を行った時に、ニーズのある小学校低学年の児童の様子を聞くと、幼児期の支援はどうしていたのだろうか疑問に思うことがある。小学校入学により新たに起きる行動もあると思うが、おそらく幼児期から気になる行動は出現していると考えられる。

「気になる子ども」のタイトルの本が並ぶくらいであるから、保育者も「気になる子ども」は気になっている。幼児期の子どもたちのニーズを支援につなげる難しさは、保育者自身が、まだ年齢が小さいから、同じルーティンを繰り返す経験の中でできるようになっていくという考え方があっていいのではないかと。保育は小学校の授業よりも活動の自由度が高く、極端な言い方をしてしまうと保育者のニーズのとらえ方によっては何もしないことにもつながってしまう。

一方で、巡回相談に行くこと、気になる子どもどのように保育したらよいかという悩みも多く聞かれる。特別支援教育の支援を活用することももちろんあるが、保育のスキルで解決することも多く経験してきた。保育のスキルを充実していくことは、特別支援教育にもつながることが予測され、保育者を養成していく学生の段階で、「幼児の具体的な姿を捉えながら、それに応じた具体的な保育を考える」ことを積み上げていくことが必要になる。

III. 通常学級児童のニーズの把握と授業改善から

通常学級における特別支援教育の困難さとして、担任教師は児童生徒のニーズの把握が十分ではない、ニーズの把握はできたとしても、それを具体的に支援につなげていくことの難しさが挙げられる。多くの支援に関する書籍もあるが、現実に目の前の子どもに対応することには十分ではない。一方、通常学級では、授業をすすめていくことも求められているため、授業を展開しながら、どこで、何を行っていくとよいのかということも難しさの1つである。

特別支援教育を主題とする小学校の校内研究に参加し、担任教師の困難さの把握や授業の分析を行った（芳賀・腰川,2011）。この中で、担任教師の気づき以外の授業におけるニーズを把握すること、授業の実践の中で改善をするプロセスを見てきた。指導案についても、既存のモデルに基づいた指導案から、児童のニーズの把握に基づく指導案へ修正されていった。この担任教師の事例を通して、具体的な支援や授業につなげるために何が必要であるのかを整理していきたい。

IV. コーディネーターの研究から

小・中学校の担任教師は、コーディネーターにスクールカウンセラーと同じような支援と児童生徒に対する「具体的な支援」も求めている（伊藤・腰川,2013）。特別支援教室のモデル校の実践でもその実践の中核となる重要な役割をコーディネーターが果たしていた。コーディネーターは単なる分掌だけではなく、通常学級の担任を支え、通常学級の児童と特別支援教育をつなぐ大きな役割を担ってきていることがうかがわれる。

コーディネーターのインタビュー調査から、コーディネーターが担う役割として、「情報収集」「校内委員会での報告と支援の検討」「コーディネーション行動」「担任への精神面の支援」「担任への支援方法の助言」といった役割を果たしていることが明らかになった（腰川・芳賀・河村,2014）。この役割もコーディネーターによってできるところに違いがあり、いくつかのタイプに分けることができる。特別支援教育の中核となるコーディネーターの支援に向けてどのようなことが明らかになっており、課題があるのかについて報告する。

(引用文献)

- 芳賀明子・腰川一恵 (2011) 個別の教育ニーズ把握と授業改善の課程—ある小学校の特別支援教育を主題とする校内研究を通して—。聖徳大学児童学研究所紀要 13
- 伊藤卓宏・腰川一恵 (2013) 小中学校教師が求める特別支援教育コーディネーターの援助特性に影響する要因の研究。日本発達障害学会第48回大会
- 腰川一恵・芳賀明子・河村久 (2014) 特別支援教育コーディネーターが認識する実践と課題。日本特殊教育学会第52回大会
- 文部科学省(2014)特別支援教育整備状況調査結果について